2015 パリ写真事情

2015 Paris photo report

市川　泰憲

Yasunori ICHIKAWA

Author JCII Camera Museum Steeringcommittie member

毎年11 月になると日本からパリを訪問する写真関係者が多い。すでにご存じの方も多いだろうが、「サロン・ド・ラ・フォト」「パリフォト」「フォトフィーバー」と呼ばれる写真関連の行事が開催されるが、それらを中心として、美術館、ギャラリーなども写真展を開催して、11 月のパリはさながら写真月間といった感じとなる。

この時季のパリを訪れたのは2013 年に引き続いて2 度目。いずれも奇数年だが、本来偶数年の11 月は“パリ写真月間”として設定され、大きな写真イベントが複数開催されると聞くが、パリの写真イベントは毎年にぎわいを見せており、最近は毎年11 月がパリ写真月間ではないかと思わせるほどだ。

そんなパリに、11 月8 日から13 日まで滞在し、限られた部分ではあるが、実際に関連催事を見てきたので、簡単ながら報告させていただく。

■サロン・ド・ラ・フォト（11 月5 日～9 日）

サロン・ド・ラ・フォト（Salon de la Photo）は日本のパシフィコ横浜で開かれる「CP＋」と同様なカメラやレンズなど写真のハードウェア主体のイベントだと考えて問題ない。すでに80 年以上の歴史があるようだが、かつてはドイツ・ケルンで開かれている写真・映像分野の見本市「フォトキナ」と交互に隔年開催されていたが、このサロン・ド・ラ・フォトは一時期休止されたのち、ここ5 年ぐらいは毎年開かれている。

開催場所は、パリ・エキスポ、ポルト・ド・ベルサイユ（Paris Expo Porte de Versailles）、いわゆるパリの見本市会場で、地下鉄ポルト・ド・ベルサイユの駅前に位置する。ホームに降り立つとまずソニーのα7 の広告が目に入る。駅構内から通路まで広告はソニー1 社が独占している。こ

ポルト・ド・ベルサイユ駅はホームから通路までソニーの広告一色で埋められている

会場は入って正面なのですぐわかる。周辺は工事中で、サロン・ド・ラ・フォトの会場もやがては増床するという

の光景は2 年前もまったく同じで、ソニーがフランスでどれだけのポジションを持っているのだろうか、興味あるところだ。

ゲートをくぐるといくつかの展示場が散在するが、少し歩いた正面の建物がサロン・ド・ラ・フォト会場のパビリオン4 だ。開場は10 時からだが、それ以前に入り口手前ではセグウェイに乗ったコダックの女性がチラシを配っている。

入場は事前登録制で、胸から下げる登録証は、名前とともにバーコード、客種が分類プリントされている。入退場は日本と異なり、すべて係員によりバーコードの読み取りが行われる。

各社ブースを見て歩くと、会場内は、日本のカメラ、レンズメーカーが大きくブースを構えているが、カメラではライカカメラ社が、IT 系では

オープン前に、会場へ向かう人にコダックガールがチラシを配布していたが、展示ブースは幅3ｍほどと小さい

エントランスで10：00からの入場を待つ人々。事前登録制で、全員入出時にバーコードを読み取られる

キヤノンブース

ニコンブース

オリンパスブース

ソニーブース

WACOMやHUAWEIなどが出展しているのが目につく。

実は、サロン・ド・ラ・フォトは、製品に加え、写真作品が展示されるのも特徴で、今回はパリのヨーロッパ写真美術館（MEP）が土門拳、木村伊兵衛、植田正治ら日本人写真家の作品を展示していた。このコレクションは、日本の大日本印刷の協力の下に行われたと入り口に記されている。

また、ZOOMSと呼ばれ、サロン・ド・ラ・フォトに向けて行われた公募写真の入選作品も展示されている。選考は、フランスの写真雑誌編集長によるものと、一般のユーザーによりインターネットで選ばれた2人の作品が展示されている。

この2人の作品は、2月にパシフィコ横浜で開かれる「CP＋2016」の会場でも展示される。加えて日本のCP＋2016に向けて行われた「ZOOMS JAPAN 2016」で選考された2人の作品も同時に展示され、2016年には日本で選ばれた2人の作品がパリのサロン・ド・ラ・フォトで展示される。

このZOOMS JAPAN賞は、国内外で通用する新進気鋭の若手写真家を支援育成するためのカメラ映

リコーブース

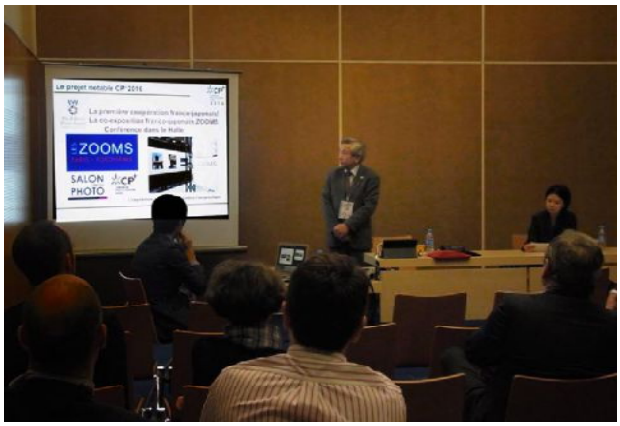
ライカカメラブース

パナソニックブース

富士フイルムブース

シグマブース

タムロンブース



フランスのジャーナリストに向けてCP＋2016の開催要項を解説する江田実行委員長

像機器工業会のCP＋実行委員会プロジェクトであり、サロン・ド・ラ・フォトでは2010に開始され、日本サイドでの選考を終えた2016年から、フランスと日本で相互乗り入れの写真賞として初めて成立することになる。なお会場の会議室では、CP＋2016実行委員会によるフランス人ジャーナリストに向けたCP+2016の記者発表も行われた。

これ以外にも会場ではいくつかの写真展が開かれており、写真集など書籍の販売もかなりのスペースを割いて行われ、カメラ・写真用品の販売店なども複数出店しているあたりが、日本とは少

ノーリツ鋼機ブース

カールツァイスブース

フランスの歴史ある印画紙メーカーであるルミエール社はベルボンの代理店であり、三脚を大きく扱っていた

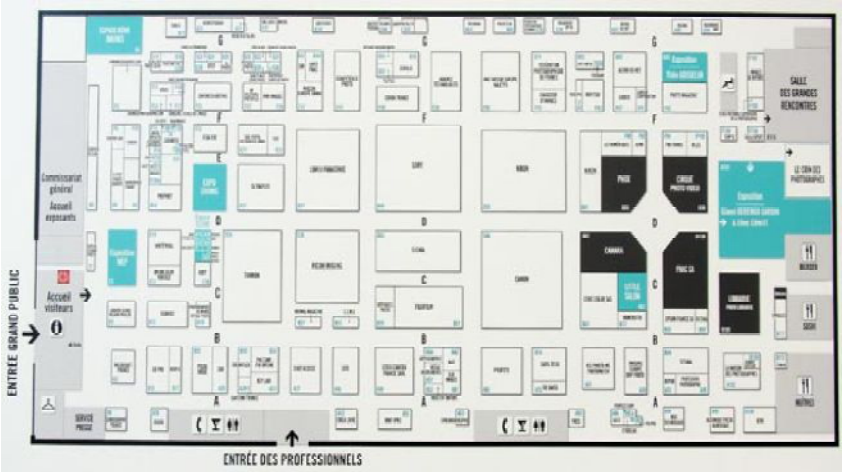
エプソンブース(右奥にコダックが見える)

フランスのミニラボメーカーであるKIS社

イタリアの三脚メーカーであるマンフロット社

カメラ写真用品販売店のブース①

カメラ写真用品販売店のブース②



サロン・ド・ラ・フォト会場の見取り図

LA PHOTOGRAPHIE

UN DEMI-SIÈCLE DE PHOTOGRAPHIE JAPONAISE
dans les collections de la Maison Européenne de la Photographie.

Pendant plusieurs années la collection de La Maison Européenne de la Photographie à Paris s'est enrichie d'oeuvres d'artistes japonais produites à partir de la fin de la Deuxième Guerre mondiale. Ceci en grande partie grâce aux dons faits par la société japonaise Dai Nippon Printing.
Dans une période de transformation et de restructuration face à la devastation de la guerre, la photographie d'avant garde des annees 60-70 du groupe Provoke, notamment avec l'oeuvre de Daido Moriyama invente face aux changements sociaux et politiques une nouvelle écriture visuelle.
70 ans après les bombardements de Nagasaki et d'Hiroshima, cette exposition présente des images puissantes et bouleversantes de Shomei Tomatsu de la série « Nagasaki » illustrant cette période sombre de l'Histoire,
Des images insolites de Shoji Ueda aux saisissants portraits de Keichi Tahara en passant par Ihei Kimura, Ikko Narahara et Hiro, les plus grands noms de la creation photographique japonaise sont représentés dans cette exposition qui témoigne de l'importante contribution du Japon dans l'histoire de la photographie du 20e siècle.

La donation Dai Nippon Printing Co.
De 1994 à 2006, sous l'impulsion de son président Monsieur Yoshitoshi Kitajima, la grande société japonaise d'impression Dai Nippon Printing Co., fondée en 1876, a constitué pour la Maison Européenne de la Photographie, une importante collection de photographies japonaises. Constituée aujourd'hui de 540 oeuvres provenant des plus grands photographes de l'après-guerre, cette « collection dans la collection » révèle la place essentielle prise par les photographes japonais dans l'histoire de la photographie mondiale.
Parmi eux : Nobuyoshi Araki, Masahisa Fukase, Seiichi Furuya, Naoya Hatakeyama, Hiro, Eikoh Hosoe, Yasuhiro Ishimoto, Miyako Ishiuchi, Ihei Kimura, Taiji Matsue, Ryuji Miyamoto, Yasumasa Morimura, Daido Moriyama, Ikko Narahara, Toshio Shibata, Hiroshi Sugimoto, Keichi Tahara, Shomei Tomatsu, Hiromi Tsuchida, Shoji Ueda, Hiroshi Yamazaki.

日本人写真家作品コレクションの挨拶パネル（ＭＥＰ）

ZOOMS　2015 の展示コーナー。左が雑誌社、右が一般から選ばれた写真家の作品。この作品をCP＋2016 で見られる

ヨーロッパ写真美術館（ＭＥＰ）は日本人写真家の作品を展示

単独でエリオット・アーウィットの作品も展示されていた

会場にはさまざまな写真作品が展示されている

熱心にカメラの使い方を聞いている(Nikon Passion)

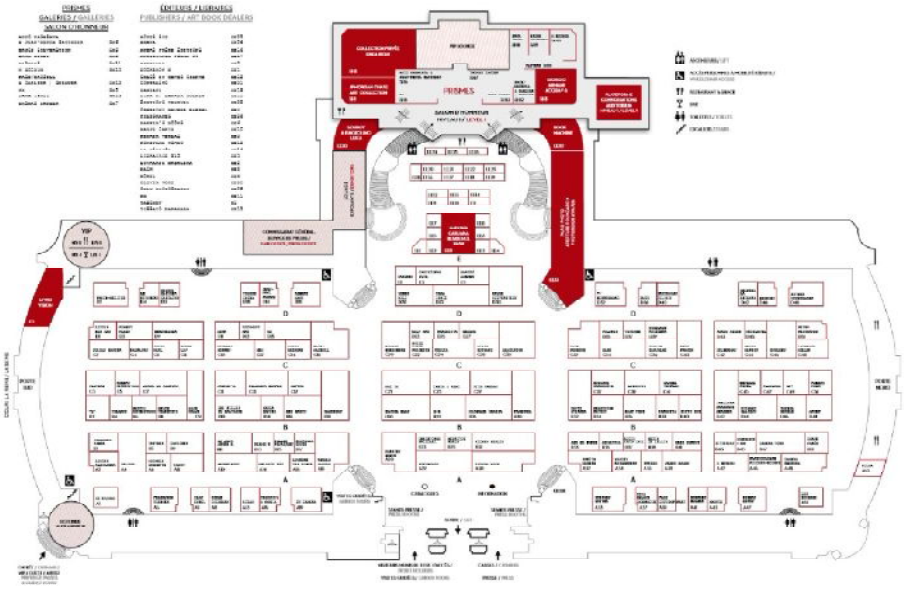
書籍コーナーでお気に入りの写真集を熱心に探す人たち

プレオープンのためか左側面口から入場した（PARIS PHOTO）

各ブースはＡ～Ｅのゾーンと番号で分けられている（PARIS PHOTO）

出展するギャラリーの国によって作風は大きく変わる（PARIS PHOTO）

中央２階のテラスから出版社コーナーを望む（PARIS PHOTO）



パリフォト会場見取り図

プリントの中央に花の写真をプリントしたタイルが貼ってある（PARIS PHOTO）

し異なる。

■パリフォト（11 月 12 日～15 日）

パリフォト（PARIS PHOTO）は、本来は 12 日からの開催だが、事前に入手した入場パスはゲストパスで、11 日のプレビューにも入場することができた。この日は正面入口からではなく左側面口からだったが、長蛇の列で入場には少し手間取った。

会場は、ギャラリー、写真エージェンシー、出版社、古書店など写真集販売業者などで 34 カ国から 179 社が出展、内 152 社がギャラリー関係である。

このうちヨーロッパのギャラリーが 99 社、アメリカのギャラリーが 27 社となっており、日本からのギャラリーは、MEM、タカ・イシイ、ユミコチバアソシエイツ、アキオナガサワギャラリー、出版社・写真集販売業者ではアマナ、ブックショップＭ、小宮山書店などが確認できた。

経年で出展社状況を見ていないからよくわから

会場にはさまざまなプリント種が展示されているが、基本的には銀塩かインクジェットが主流である

深瀬昌久、bukubuku (1991)、79枚セット、(michalhopping gallyにて)

サイアノ、湿板などオルタネティブプリントをいくつか見ることはできたが、全体からはこの種のプリントは少ない

ないが、ギャラリー業者の152社のうち38社、つまり1/4が新規ということなので、出展社の入れ替わりはある程度しかたないようだ。

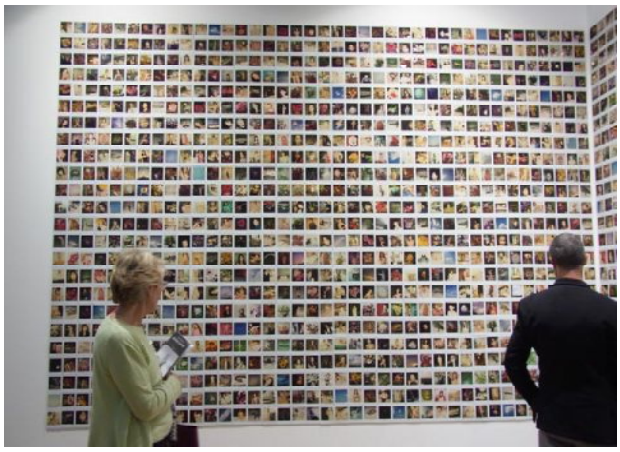
会場では、日本人の作品を複数見つけることができた。特に「本日の浮遊写真」などで知られている林ナツミ氏の作品を扱うMEMでは、展示作品がちょうど成約するところで、そのやり取りを遠巻きに見ていると、購入者との会話や、カードでの決済など、パリフォトでの若手日本人作家のポジションを垣間見た感じがした。

今回は都合により2時間ぐらいで会場を足早に

作品解説と価格を見ながらの客もいる

林ナツミ氏の作品の前でお客さんと話すＭＥＭ の担当者

ＶＩＰ ラウンジの入り口左側には森山大道の「写真よさよなら」がサインとともに、右側には荒木経惟のPola Eros (1998-2015) が20,000枚近くも展示され圧倒される

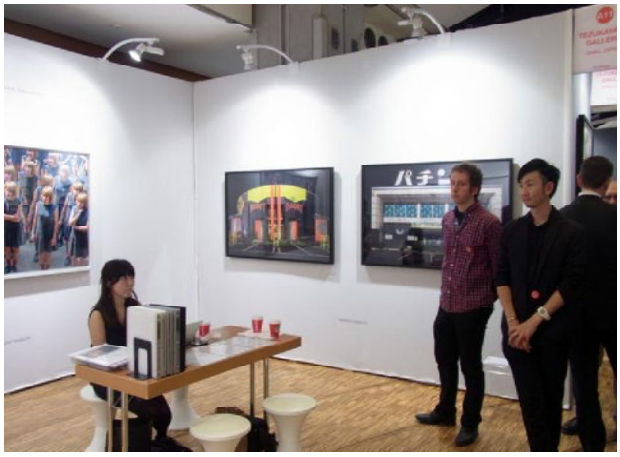


20,000枚近くも壁に貼り付けられた荒木経惟のPola Eros

フォトフィーバーの看板写真は日本人高倉大輔氏の作品

ルーブル・カローセルでフォトフィーバーは開催された

左の2人はアルルフォトフェスティバルにもきていたという



左端の高倉大輔氏の作品がフォトフィーバーパンフレットの表紙、ポスター、看板、入館パスなどに使われた（Tezukayama Gallery）

東川町の「パリレビューチャレンジ」でグランプリをとった関谷さんの作品を見て質問をするお客（インターアート７）

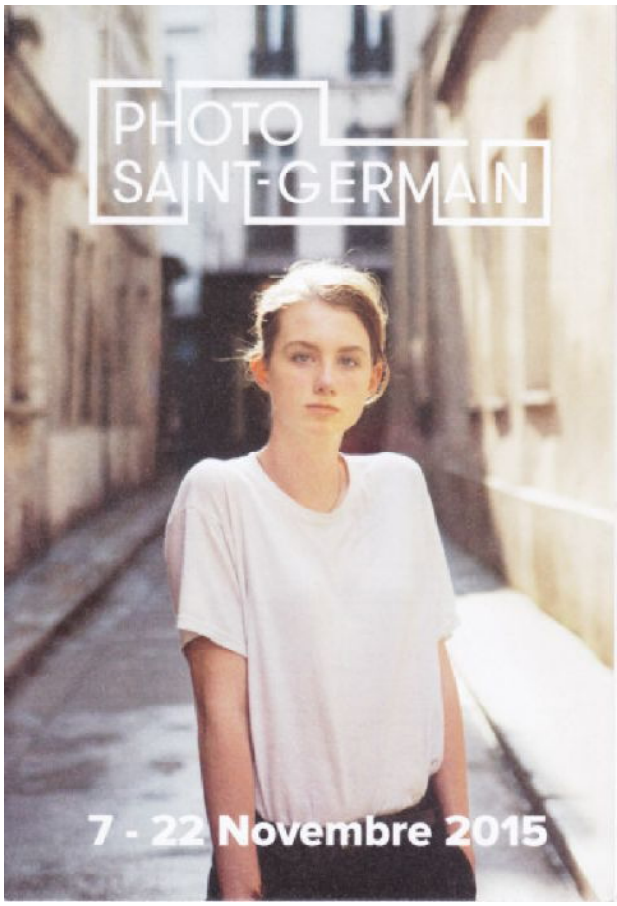
日本から出展のG.I.P.（左端は倉持博氏）

周ったが、とてもすべては見られない。もう少しは必要だろう。

■フォトフィーバー（11 月 12 日～15 日）

フォトフィーバー（fotofever 2015）は、ルーブル美術館わきの地下イベント会場であるルーブル・カローセルで開かれる。「Catch The Fever Collect PHOTOGRAPHY」をキャッチフレーズに、パリフォトをスケールダウンしたような展示会だが、前回訪れた 2013 年がルーブル・カローセルでの開催第 1 回目だということなので、今年で 3 回目となる。その 1 回目のときは、スペース的にかなりゆったりした印象があったが、今回は参加社が格段に増加し、会場は隅々まで埋まっていた。

ギャラリー、出版社を含めた全出展社数は 102、うち日本からの出展は 8 社で、一昨年より増えており、数の上ではパリフォトと大きく変わらないが、参加コスト・規模からするとこちらのほうが出展しやすいようだ。



フォト・サンジェルマンのポスターとチラシの表紙は同じ

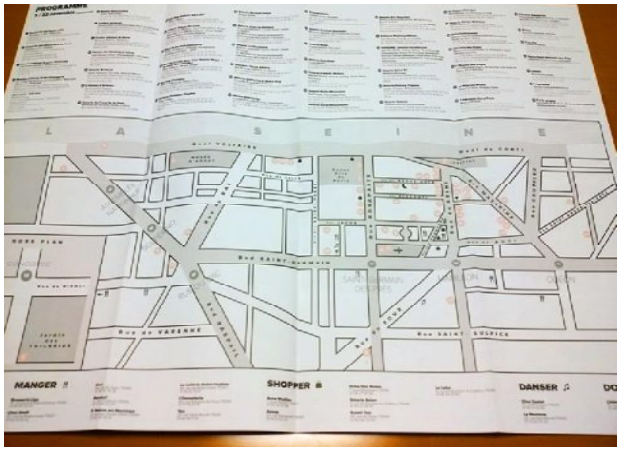
このうち私の知る「インターアート7」の小林貴氏は、第1回目は銀座・柴山画廊の名を借りての参加であったが、2回目からは自社名の「インターアート7」で出展しており、3年連続参加はそれなりの成果が上がっての結果だろう。

今年は特に北海道東川町国際写真フェスティバルの「パリデビューチャレンジ」にてグランプリを受賞した関谷恵さんの作品を持参し、現地のコレクターがさっそく買い上げたので、実績が十分に評価されたと喜んでいた。なおフォトフィーバーの入場は、全日券で40ユーロである。

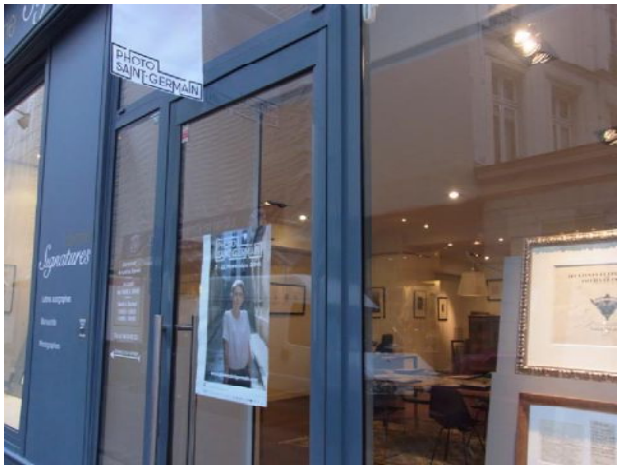
■フォト・サンジェルマン（11月7日～22日）

フォト・サンジェルマン（Photo Saint-German）とは、オルセー美術館やPolycopies（後述）などを含め、サンジェルマン・デ・プレ地区にある49のギャラリーがパリフォトの開催期間に合わせて写真展示を行うイベントだ。

またフォト・サンジェルマンに名を連ねていなくても、写真を展示しているギャラリーは多く、La Huneという書店では写真を販売しており、2階ではエリオット・アーウィット（Elliott Erwitt）の作品展示をしていた。エリオット・アーウィットの作品は日本でも人気だが、日本でよく見る作品とは別の写真も多く、国によって好まれる作風



チラシの裏は地図。ギャラリーが49カ所ピンクでマークされてる



入り口にフォト・サンジェルマンの旗とポスターを掲示

ポスターだけを掲示したギャラリー

ギャラリーでの展示スタイルはそれぞれ異なる

着物を透過させて撮影した日本人の作品（Photo Saint-German）

ポルカ・ギャラリー。あいにく休廊だったが、たまたま通りかかったギャラリーの女性に脇の扉から入れてもらった

ポルカ・ギャラリー。表道路に面した部分とは別に、中庭を通った別の建物に展示スペースがあった

ポルカ・ギャラリー。事務所兼用のギャラリーで、地下室を含め3 部屋ぐらいに分かれて作品が展示されていた

が違うようだ。

La Hune は書店であるが、写真プリントも販売している。価格も300～800ユーロあたりと手ごろなところに設定してあり、ポンピドーセンターの前にあるイエローコーナー（後述）のプリントの販売方式と価格設定も似たような感じだ。

各ギャラリーが扱っている作家、作品は多様で、たまたまパリフォトとフォトフィーバー会場でお会いした日本人写真家・志鎌猛氏の作品はフォト・サンジェルマンに参加している2 か所のギャラリーに置いてあるといい、パンフレットには2 つのギャラリーからそれぞれ作品が掲載されていた。またフランスの通信社であるAFP の作品やアンリ・カルティエ・ブレッソンの作品を扱っている所などといろいろで、見ごたえは十分だった。

■訪れた主なギャラリー

○ポルカ･ギャラリー

ポルカ・ギャラリー（Polka Galerie）は、訪れたときはあいにく休廊だったが、たまたま通りかかったギャラリーの女性に脇の扉から入れてもらう。表道路に面した部分とは別に、中庭を通った別の建物に実際の展示スペースがあった。

イン・ビトゥィン・ギャラリー

事務所兼用のギャラリーで、地下室を含め3部屋ぐらいに分かれて作品が展示されていたが、ギャラリーとしては大きいほうであった。ドナータ・ヴェンダース（Donata & Wim Wenders）の作品が展示されていた。

○イン・ビトゥィン・ギャラリー

イン・ビトゥィン〈In)(between〉ギャラリーは開設されたばかりの2 年前にも訪れている。

日本人の写真作品を展示することをメインとしたギャラリーで、この時期移転して展示スペースを

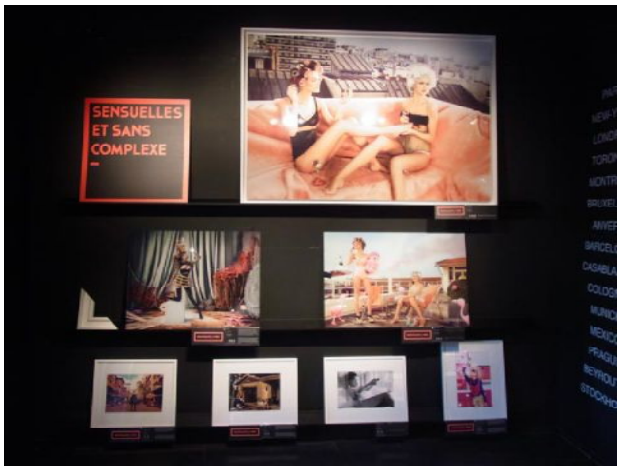
尾仲浩二氏、イン・ビトゥィン・ギャラリーは、夏に移転したばかりで、展示スペースは１階と地下に拡張された

Taka Ishii ギャラリーの入り口。門扉にはキーがあり、しばらくは中に入ることはできなかった

Taka Ishiiギャラリーの表札。TiGP AMANA TIG FRANCE SASと書かれ、両社のフランス事務所のようだ

事務所兼用のギャラリーで、森山大道の作品が飾られ、脇には日本人写真家の写真集が置かれていた（ＴｉＧＰ）

イエローコーナー



イエローコーナーで販売されている写真。価格は一番下が71ユーロ、中が330ユーロ、上が1140ユーロと書いてあるから、お手軽に写真をということだろうか

１階と地下室にと広げている。パリフォトに合わせた展示は、尾仲浩二氏の「兄貴」で事前に東京で案内をもらっていたので訪ねることとなった。イン・ビトゥィン・ギャラリーは、後述のフォト・ドック（PHOTO DOC）にも単独でブースをだしていた。

○タカ・イシイギャラリー

タカ・イシイ（Taka Ishii）ギャラリーは固く閉ざされた門の中にある建物の一角にあり、中に入るには門扉を開けてもらう必要があった。

門扉の表札には、“AMANA TIG FRANCE SAS”と書かれており、アマナとタカ・イシイギャラリーの合弁会社としてのフランス事務所のようだ。事務所には現地女性が１人いて、森山大道の写真が展示され、日本人作家の写真集が複数販売されている。

○イエローコーナー

イエローコーナー（YELLOWKORNER）はポンピドーセンターの前にある写真を手ごろな価格で販売するギャラリーである。２階では「Lumix Meets Beyond 2020」という名称でパナソニックとアマナが共催して日本人写真家３人の作品展をやっていた。

この時期は、オリンパスも独自にパリ市内の別の場所で「PERSPECTIVE PLAYGROUND in the Palais

Lumix Meets Beyond 2020の展示作品（藤原聡志、YELLOWKORNER）

船内にて本を並べる街道のメンバー（Polycopies）

de Tokyo」 と題してカメラを楽しむイベントを10月28日から11月25日まで行っていた。

このほか、SIT DOWNギャラリー（Tom Wood）、Rastollギャラリーなど訪れたギャラリーはたくさんあるが、主だったところを記させていただいて、省略させていただく。

■ポリコピー（11月11日～14日）

セーヌ川の船上で行われているポリコピー（Polycopies）という、写真ブックフェアに向かう。こちらには写真家・尾仲浩二氏の主宰する「街道」という写真グループが出展しているというので訪問した。

船内にはコーヒーショップもあり、35のグループや出版社がブースをだしている。訪問した日は

Polycopiesはセーヌ川に係留された船で行われた

船内に机を並べ本を売る(Polycopies)

ちょうど初日の11日で、13：00にオープンしたばかりだったが、尾仲氏によるとパリフォトの開催期間中になると船上は人であふれるという。

日本からの街道グループは、この日のために向けて写真集をメンバーそれぞれが日本で作成して持参したようだ。参加出版社は、ほとんどがフランス、イタリア、ノルウェーなどヨーロッパ圏からだが、日本からは、街道、赤々舎、禪フォトが出展していて、船上には日本人も多い。

■フォト・ドック（11月12日～15日）

フォト・ドック（PHOTO DOC）は昨年まではPHOTO OFFと名づけられていたが、今年から改名された。会場は他のイベント会場より少し離れた地域の20区にあり、BELLEVILLOISEという地区の古い集会場のようなところを利用して写真展示とポートフォリオレビューを受けられる場が設けられていた。

写真展示は、全体で数は10ブースあるかないかだが、レビューが受けられる場所が併設されているのが注目された。前回、今回を含めパリフォトに関連したいろいろな場所を見学してきたが、レビュアーによってポートフォリオレビューが行われている場面を見れたのは初めてだ。ここで見る

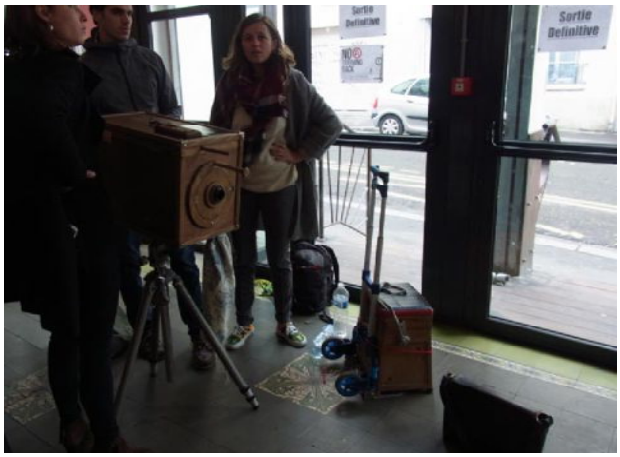
PHOTO DOC のポスター（右）

フォト・ドック会場入り口

セックスピストルズの写真は今でも人気のようだ(PHOTO DOC)

レクチャー、ポートフォリオレビュー風景(PHOTO DOC)

屋久島国際写真祭の展示（PHOTO DOC）



街頭写真撮影の仕掛けが持ち込まれていた（PHOTO DOC）

限りレビュアーは女性も多く、レビューを受けている人の中に日本人はいなかった。レビューを受けるためには、作品を持参することに加え、語学力も必要となるが、このあたりは、これからの日本の若者たちが参加するにあたり、今後の広がりにも大きく関係すると考える。

写真展示ブースは、現地のギャラリーの出展が多いが、この中に日本の「屋久島国際写真祭」の展示が行われていた。なぜ日本の鹿児島での写真フェスティバルの報告がこの場で行われているのだろうか。調べてみると、屋久島国際写真祭は、2015 年は 10 月 24 日～29 日まで鹿児島県の屋久島でワークショップと写真展示が行われている。主催者はフランス人と日本人写真家の 2 人であり、パリフォトのデザイナーも関係して、フランスの写真家 3 名、日本の写真家 12 名がフェスティバルに参加している。

屋久島国際写真祭の展示ブースには、誰もいなかったので話を聞くことはできなかったが、日本で行われた屋久島国際写真フェスティバルのフラ

オフ・プリントの会場入り口

所狭しと本が並ぶオフ・プリントの会場

ンスでの活動報告といったところだろうか。

いずれにしても日本とフランスの写真のつながりが、このような形で行われているのには、少なからず驚いた。

■オフ・プリント（11 月 12 日～15 日）

オフ・プリント（OFF PRINT）は写真集を販売するイベントで、サンジェルマン・デ・プレのLa Hune書店の前から歩いて8分ほどのパリ美術館（Beaux-arts de Paris）の中庭で開かれていた。門をくぐると、右手にかなり時代がかった建物に大きなホールがあり写真展をやっている。この建物を通りすぎるとオフ・プリントの会場となる。

会場に入るのには5ユーロの入場料を支払うが、4 日間の入場代とコーヒーかティーの無料券が含まれている。写真集の展示販売は中庭にぎっしりという感じで、多くの人でにぎわっていた。日本からの出店は3 社チェックできたが、お客さんの中には日本からとみられる人も何人かいた。

全体を見渡すと、出店しているのはヨーロッパ圏からが多いが、アメリカからの参加が多く見えたがこの場だけのことである。

ヨーロッパ写真美術館(MAISON EUROPEENNE DE LA PHOTOGRAPHIE)

BURANO BARBEI のPASSAGE は、最初に取材に訪れたのが 1968 年の日本だということで、1968 年成田三里塚闘争から 2015 年まで、日本で撮影された多くの作品が展示されていた（MEP）

BURANO BARBEI の使っていた機材はオリンパス OM-4 ブラック。作品ととも傷ついたボディが展示されていた（MEP）

■ヨーロッパ写真美術館

ヨーロッパ写真美術館（MAISON EUROPEENNE DE LA PHOTOGRAPHIE VILLE DE PARIS＝MEP）はマレ地区のサンポール駅近くの大型の写真ギャラリーで、元貴族の館であったものを市が買い上げ美術館に改装し、1996 年に開設されたという。

その建物をそのまま利用していることから、展示スペースは、階段を上り下りした先に分散した

展示プリントは大型から額装された8×10ぐらいまでと変化に富んでいる（MEP）

部屋に分けられている。前回、訪れた時はセバスチャン・サルガド展を全館使って開催していたが、今回は0・1・2・3階の分割された展示フロアごとに6人の写真家の作品展示がなされていた。

展示内容は、BURANO BARBEIのPASSAGE、MASSIMO BERRUTIのGAZA:EAU MIRACLE、ANDREA & MAGDAのSINAI PARKなどであり、ドキュメンタリー系が多い。展示期間はパリフォトの開催に合わせたのであろう11月12日から2016年の1月17日までで、6展示が一斉に切り替わる。これはたぶん建物の構造上、一部の展示を入れ替え制で行うのが難しいからではないかと思う。

建物内には、収蔵庫、ホール、図書室、視聴覚室などがあり、必要に応じて利用することができる。MEPで注目されるのは、写真展示のみならずバックステージツアーに加え、ガイドツアーが会員向け、単身入館者、教師向け、成人団体向け、学生団体向け、幼稚園・小学生の子供向け、子供向け日曜学校、6～11歳児向けのワークショップ、などプログラムがきめ細かく用意されていることだ。

MEPは、常時写真展示を行っているが、前記のようにサロン・ド・ラ・フォトには単独写真展示スペースを確保している。なお館長のジャン＝リュック・モンテロッソー氏は、パリフォトの開始にも関与し、パシフィコ横浜で開催されたCP+2014には、ゲストスピーカーとして招かれ「アートとしての写真とその価値」というテーマで講演している。

開館は11：00からで、入場は8ユーロ。

■ジュ・ド・ポーム国立美術館

ジュ・ド・ポーム国立美術館（Jeu de Paume）は、写真、映像関係の展示を主とし、コンコルド広場の近くにある。こちらでは、パリフォトに連動し、日本でもジャンプ写真などで知られるフィリップ・ハルスマン(Philippe Halsmann)の特別展が行われていた。

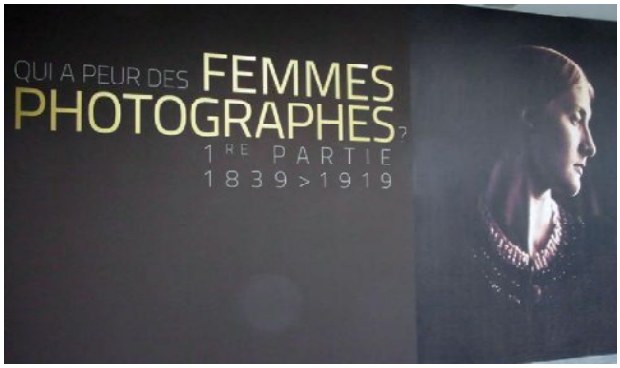
ジュ・ド・ポーム国立美術館

ハルスマンの作品は日本でも数多く知られているが、特にジャンプは著名。写真はライフの表紙を飾ったジャンプするマリリンモンローの作品

撮影風景のメーキングビデオだろうか、ハルスマンの撮影姿勢を知れて興味深い

ジャンプ台の前で飛び上がる小学生

オランジェリー美術館



タイトルは「誰が女性写真家を恐れているのですか？」

熱心に写真を見る日本の女性写真家

会場は、ハルスマンによる、ダリ、マリリンモンローなど多数有名人のジャンプ写真が飾られているが、ハルスマン自身が撮影している場面の記録ビデオも映写されていて、なかなかおもしろい。美術館出口には、フィリップ・ハルスマンの名前がプリントされたジャンプ台があり、訪れた小学生たちがジャンプに興じていた。入場料は10ユーロ。

■オランジェリー美術館

オランジェリー美術館（Musee de l'Orangerie）では、パリフォトに連動した企画展として「誰が女性写真家を恐れているのですか？ 1839-1919」（2015.10.14～2016.1.24）を展示していた。1839～1919年と期間を限定して100年以上前の女性による写真だけを集めた展示はおもしろい。

ポンピドー・フランス美術館

シリンダー油圧式のエレベーターが3基設置されている

このオランジェリー美術館にはモネの大きな「睡蓮」の絵がパノラマ展示されているが、ルノワール、セザンヌ、ピカソやマティス、ゴーギャンなどの作品も見られる。約1時間の時間をそれぞれ自由に見る。入場料は9ユーロ。

ルーブル美術館、オルセー美術館も近く、同じ期間中にオルセー美術館ではオランジェリーの企画展に連携して「誰が女性写真家を恐れているのですか？ 1818-1945」展が開催されていたが、残念ながら時間の都合で見ることはできなかった。

■ポンピドー・フランス美術館

ポンピドーセンター（CENTRE POMPIDOU）の建物は長方形の立体物であり、箱のように見えるが、左下から右上に上っている階段がアクセントになっている特徴的な建物だ。訪れたときは、ちょうど午後の斜光線が当たり階段が黄色く輝いて美しい。

美術館の内部は無料と有料ゾーンに分かれている。まず入って、何となくどこかで見たような建物内部の空間設計なので、注意深く見ていると中央部にはシリンダー油圧式のエレベーターが3基並んでいるが、これだと思ったのは金沢21世紀美術館で、設置イメージがかなり重なる。

地下には無料の写真ギャラリーがあるというの

ポンピドー美術館の地下にある写真ギャラリー

ポンピドーにある、美術書、写真集、絵ハガキなどを売る書店

で行ってみたが、ちょうどパリフォトに連動したVARDA/CUBAという写真展であったが、開催は11.11～2016.2.1と訪問の翌々日からスタートなので入場することはできなかった。

ミュージアムグッズを売る書店が1階にあるが、多数の写真集を主体にポストカードや科学トイなど豊富な品ぞろえで、物によっては人気のないだろうと思われる写真集が定価の1/5ぐらいにディスカウントされ販売されていて、日本とは異なる流通販売形態であることを認識させられる。

■アンリ・カルティエ・ブレッソン財団

モンパルナス駅近くの14区にあるHCB（Henri Cartier Bresson Foundation）は、2013年にも訪れている。1階が受付、2・3階が特別企画展示、4階がブレッソンの作品が飾られている。訪れたときの特別企画展は、パリフォトにも連動しているようで、カナダ人写真家のJEFF WALLのSmaller Picturesであった。4階のブレッソンの展示は、前回もそうであるが、多くの数は期待できない。ブレッソンの作品を数多く見ようとしたら、市中のギャラリーのほうがよいのかもしれない。

入館には7ユーロの入館料を必要とするが、毎

アンリ・カルティエ・ブレッソン財団

アンリ・カルティエ・ブレッソン財団の4階に展示されているブレッソンの作品

週水曜日18：30からは無料となる。前回は有料の時間帯に訪れたが、今回は無料のときに訪れたわりに入館者は少なかった。18：30以降という時間では、観光客は少ないのだろう。

■ナダール・スタジオ跡の記念プレート

オペラ座近くのカプシーヌ通り35番地に、ナダールが1860年に写真スタジオを設置した記念碑があるというので見に行った。

番地からすると、すぐに場所は判明したが、それらしい記念碑はなかなか見つからない。地図からするとBALLYの入っているビルらしい。道路の対岸からBALLYの店舗を見つけることができ、改めてそのビルの上の方を見ると、建物のデザイン

ナダールの記念プレートのあるカプシーヌ通り35番地

ナダールが気球で世界初めて空撮を行ったことの記念プレート

はナダールがスタジオを作った当時の外観を継承しているのがわかる。あれこれと探すうちに、通りに面したこのビルの柱にナダールが気球に乗って空撮しているイラストをプリントした記念プレートを見つけた。1人で探すとなると大変だが、同行メンバー全員で探すと何とかなる。

■2015のパリ

帰国直後、羽田空港でわれわれが13日の18：55にパリ・シャルルドゴール空港を発った約2時間後にテロ事件が発生していたことがわかった。

後に気づいたことだが、ほとんどの公共施設と多くの人が集まるところでは必ず荷物検査を主にしたセキュリティーチェックを受けたが、空港からスタートするとチェックを受けるのに慣れてしまっていて、滞在中の要所要所でのチェックにもそれほど違和感がなかったのも事実である。

また滞在中のパリ市内の移動は地下鉄と徒歩によって行われたが、2年前の訪問のときはメトロの車中で集団スリに出会うなど、地下鉄での移動にはかなりの緊張を強いられたが、今回は混雑も少なく、何となく治安が良くなったのではないかと感じていたが、すでにこの時点でパリ市内は厳戒態勢にあったのだろう。

実際、地下鉄連絡通路の中には複数の警察官が巡回していたし、サンジェルマン・デ・プレのユダヤ人地区では、自動小銃を持った警察官が複数で巡回警備していたが、そんなものなのだろうと、あまり気には留めることはなかった。いずれにしても、当初の予定通りに視察を終え、メンバー全員が無事に帰国できたのが何よりだった。

今回のテロ事件の発生により、パリフォトは会期の14・15日を残して中止となり、その一方でフォトフィーバーは開催が続行され、中止されたパリフォト会場のグランパレ前からはフォトフィーバーの開かれているルーブルまでシャトルバスを出すなど、商魂のたくましい一面も見せていたというのは、その後パリ市内に残った知人からの情報である。今回の事件が、今後のパリフォトに対してどのような影響を残すか、日本人が出展、見学ともども多く訪れていただけに気になる部分である。

展示は、パリフォトでは1970年代の日本人写真の作品が会場を席巻していたが、その一方で、日本人の作品そのものに70年代登場作家の次の世代を複数見つけることができた。それはギャラリーを含めた写真エージェンシーの働きによるものとも考えるが、これからの時代は世界の写真界において、カメラ・レンズ同様に日本人写真家のポジションがさらに向上し、不動のものとなっていくのだろうか。2016年のサロン・ド・ラ・フォトの会期は事務局の発表によると11月10日（木）～14日（月）と決められた。これは、ずばりパリフォトすなわちパリ写真月間にオーバーラップする開催日程である。撮影のハードウェアとソフトウェアとしての作品が一体化して写真のイベントが行われるのは本来なのだろう。

日本で2月に行われるCP＋2016では、フランスのZOOMSに加えZOOMS JAPANの作品展示もなされ、さらに新たな試みとして自作写真集を展示販売する「PHOTO! FUN! ZINE!」や「中古カメラフェア」なども併催されることになった。ハードとソフトの融合、最新カメラと古典カメラの共存。日本の写真業界は新たな一歩を踏み出すことになる。

なお、今回のパリ行きはカメラ映像機器工業会のCP＋実行委員会（江田尚之委員長）の視察に同行させていただいたことによるもので、この場を借りて関係各位に深く感謝する次第です。

終わりに、本稿は、より詳細を知りたい方のためにWeb検索できるようにと、パリの公的な施設に関しては日本語に加えフランス語も併記し、関連イベントは英語も記しましたので、いずれかの語句で施設やイベントを検索できるはずです。